様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２２日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５２０４０９
研究課題名（和文）　第二言語習得研究に基づいた運用力養成のためのシャドーイングの研究

研究課題名（英文）　A Study of the Shadowing Practice from the Perspective of Second Language Acquisition Studies

研究代表者
迫田　久美子（SAKODA KUMIKO）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：８０２８４１３１

研究成果の概要：

本研究は、五つの実験調査を実施し、以下の二点を明らかにした。
①第二言語習得研究の観点から、シャドーイングのメカニズムを分析し、作動記憶や日本語の運用能力の養成において、シャドーイングが音読や書写よりも効果があること、教材の難易に関係なく効果が見られる事等を明らかにした。
②国内の教育機関で授業にシャドーイングを導入し、教室場面での実施可能性を検証し、多人数の授業においてもシャドーイングの有効性を実証した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,000,000	0	1,000,000
２００７年度	900,000	270,000	1,170,000
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	630,000	3,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：日本語教育・第二言語習得・シャドーイング・運用能力・アウトプット・即時処理・日本語学習者

１．研究開始当初の背景

20 年以上、日本語を第二言語とする習得研究を行ってきて、学習者の習得に影響を与える大きな要因の一つとしてインプットとアウトプットの強化が重要であることを確信した。特に、言語知識の理解ではなく、具体的な運用能力にむすびつけるためには、即時処理による自動化が重要であると考え、それをいかに教育現場に応用できるかが重要な課題であった。そこで、数年の準備期間を経て、「運用能力を育てるためのシャドーイング研究」を開始した。

既に、英語教育でも実証されているが、日本語学習者を対象として、2004 年と 2005 年に日本語のシャドーイングの有効性を検証し、さらにさまざまな要因を設定して、シャドーイングを多角的な観点から観る必要があると感じた。特に、学校教育場面でのシャ

ドーイングの応用等についての検証も必要であった。

２．研究の目的

本研究は、以下の三点を目的として行った。
①第二言語習得研究の観点から、シャドーイングのメカニズムを分析し、日本語の運用能力の養成における可能性と問題点を明らかにする。
②国内の教育機関（民間日本語学校）で毎日の授業の一部にシャドーイングを導入し、教室場面でのシャドーイングの実施可能性を検証する。
③海外の教育機関でシャドーイング訓練を実施し、環境に応じた指導法を提案する。

しかしながら、②の研究は事前調査も含めて時間をかけて行ったので、③の目的の研究に進展できず、今後の課題となった。

３．研究の方法

(1)学会発表　迫田（2006）

シャドーイングの有効性の検証の一つで、書写のそれぞれとシャドーイングを比較した調査である。

１ヶ月間の短期研修（2005 年度研修）の留学生（韓国の大学生 32 名）に対し、授業の最初の 15 分でシャドーイング群と書写群にわかれてそれぞれの方法で指導し、事前および事後における複数のテストで成績の高低差を測定し、統計分析にかけて有意差を調査した。

(2)学会発表　迫田ほか（2007）

シャドーイングを実施する際、レベルの違いにおいて、その効果に違いがあるかどうかについて調査した研究である。

１ヶ月間の短期研修（2006 年度研修）の留学生（韓国の大学生約 30 名）に対し、事前テストで成績低群と成績高群に分け、毎日の授業開始 15 分のシャドーイング訓練を行い、事前と事後の複数のテストで成績を比較した。

(3)学会発表　近藤ほか（2007）

2005 年と 2006 年の２年をかけて事前調査を行い、2007 年４月から民間の日本語学校においてシャドーイングがカリキュラムの一環として導入可能かどうかに関する本調査を実施した。

具体的には初級クラスから上級クラスまでの７クラス（計 109 名）に対して実施、事前と事後での成績を行った。個別課題として、音読や要約テスト、前期終了時には学習者と教師にアンケートも行った。

(4)学会発表　迫田ほか（2008）

シャドーイングの教材レベルの難易の違いにおいて、その効果に違いがあるかどうかについて調査した研究である。

１ヶ月間の短期研修（2007 年度研修）の留学生（韓国の大学生約 30 名）に対し、教材を学習者のレベルより難しい内容と易しい内容（語彙レベルでの難易とし、文型、語数、速度等は統制した）で実施した。毎日の授業開始 15 分のシャドーイング訓練を行い、事前と事後の複数のテストで成績を比較した。

(5)雑誌論文　迫田ほか（2009）

シャドーイングを実施する際、その指導におけるフィードバックの方法の違い、具体的には「教師主導型」「ペア学習型」によってその効果に違いがあるかどうかについて調査した研究である。

１ヶ月間の短期研修（2008 年度研修）の留学生（韓国の大学生約 30 名）に対し、教師主導の指導群とペア学習群に分け、毎日の授業開始 15 分のシャドーイング訓練を行い、事前と事後の複数のテストで、成績を比較した。

４．研究成果

前節の研究方法のそれぞれの研究にしたがって研究成果を述べる。

(1)学会発表　迫田（2006）

シャドーイング群と書写群を比較した場合、表１の結果となり、書写よりもシャドーイングの方に若干の優勢が見られた。

【表１　書写とシャドーイングの比較】

	書　　写	シャドーイング
SPOT	―	―
書取り	―	―
日能試	―	＋
ＤＳＴ	―	―
ＬＳＴ	**―**	**＊**

よって、書写も効果があるが、シャドーイングの方が LST（作動記憶）と能力試験において効果が大きいことが明らかになった。

(2)学会発表　迫田ほか（2007）

シャドーイングを実施する際、レベルの違いにおいて、その効果に違いがあるかどうかについて調査した結果は以下の通りである。

【表２　成績低群と成績高群の比較】

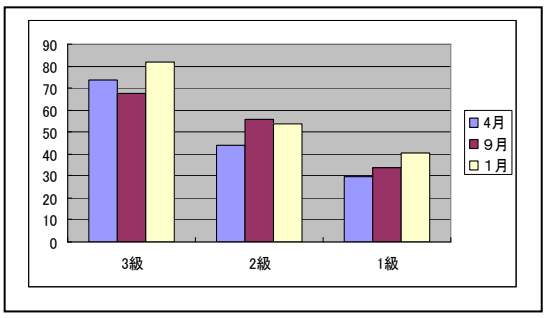
	成績低群	成績高群
SPOT	―	―
LST	―	―
J Test	**＊**	**―**
日能試	**＊**	**―**

よって、シャドーイングは、成績低群の方が成績高群よりもその効果大きいことが明

らかになった。

(3)雑誌論文　近藤ほか（2008）

民間の日本語学校での導入を試みた。４月と９月と１月の日本語能力試験の結果を比較した結果が図１である。



【図１　４月・９月・１月の級毎の比較】

この結果から、成績への伸びはあまり見られなかった。しかし、音読の速度や要約で変化が見られたこと、９割近くの学生達がシャドーイングを肯定的に受入れていることがわかり、教師も学生にも変化が見られた。

(4)学会発表　迫田ほか（2008）

シャドーイングの教材レベルの難易の違いにおいて、その効果に違いがあるかどうかについて調査した。

【表３　教材の難易による比較】

	教材易群	教材難群
SPOT	＊	＊
J Test	**―**	**＊**
JPT 全体	＊	＊
JPT 聴解		**＊**
JPT 文字	**＊**	

この結果から、易しい教材のみが効果を生むとは限らず、難しい教材でも効果があること、難しい教材は特に聴解力の向上に有効であることがわかった。

(5)雑誌論文　迫田ほか（2009）

シャドーイングを実施する際、指導におけるフィードバックの方法の違い：教師主導型とペア学習型による違いについて調査した。

【表４　指導方法の違いによる比較】

	教師主導群	ペア学習群
SPOT	**＊**	**―**
LST	**―**	**＊**
JPT 聴解	―	―
JPT ほか	**＊**	**―**

この結果から、ペア学習群も作動記憶の成績は有意な差が見られたが、教師主導群の方が SPOT, 日本語能力試験の文法と語彙面で成績が伸びており、教師主導において効果が大きいことが示された。しかし、これはペア学習の効果を否定するものではなく、実際には両方を統合した形態で指導することが望ましいと思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

①迫田久美子・古本裕美（他３名）（2009）「シャドーイング実践におけるペア学習型と教師主導型授業の比較」『広島大学日本語研究』19 号, 査読無, 広島大学大学院教育学研究科,日本語教育学講座, pp. 31-38.

②迫田久美子・松見法男・近藤妙子（他５名）（2008）「国内の日本語学校におけるシャドーイング実践の取り組みー８ヶ月の調査結果に基づいて」『日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出』査読無, 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座推進研究平成 19 年度報告書　日本語教育学講座,pp.45-60.

③迫田久美子（2008）「学習者はなぜ間違うのかー学習者の誤用から教え方を学ぶー」『日本語教育紀要』第５号, 査読無, 国際交流基金バンコク日本文化センター, pp. 1-15.

④迫田久美子（2006）「第二言語習得研究の深さと広がりー知識を現場に生かすー」『ヨーロッパ日本語教育』10 巻, 査読無, ヨーロッパ日本語教師会　pp.11-23.

〔学会発表〕（計　４件）

①迫田久美子・古本裕美(2008)「第二言語習得研究におけるアウトプット強化の試みーシャドーイングの教材レベルはｉ＋１か、ｉ－１かー」『第７回日本語教育国際研究大会予稿集』ICJLE 2008, vol.2, pp.393-396.7 月 12 日,釜山外国語大学（韓国）

②近藤妙子・末田朝子・森本智子・迫田久美子（他２名）（2007）「国内の日本語学校におけるシャドーイング実践の取り組み」『日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』pp.44-49.12 月 1 日,広島大学(広島)

③迫田久美子・古本裕美・松見法男(他３名)(2007)「日本語指導におけるシャドーイングの有効性－学習者のレベルの違いに基づいてー」『日本教育心理学会　第 49 回総会　発表論文集』p.477.　9 月 16 日,文教大学(埼玉)

④迫田久美子（2006）「「わかる」から「できる」への運用能力養成のためのシャドーイ

ングの研究」『第６回日本語教育国際研究大会予稿集』, ICJLE 2006, ８ 月２日, Colombia University, USA

〔図書〕（計　２件）

①迫田久美子（2009）「プロフィシェンシーを支える学習者の誤用－誤用の背景から教え方へ－」鎌田修・嶋田和子・迫田久美子（編）『プロフィシェンシーを育てる』凡人社, pp. 156-183.

②迫田久美子・小柳かおる（2006）「第二言語習得と日本語指導」迫田久美子（編著）『講座 日本語教育学 第３巻 心理と言語』スリーエーネットワーク, pp.95-127.

６．研究組織

(1)研究代表者

迫田　久美子（SAKODA KUMIKO）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：８０２８４１３１

(2)研究分担者

(3)連携研究者